

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 5月 31日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520132

研究課題名（和文）ル・コルビュジェの旅日記のスケッチを巡る影響作用史的相互参照構造の研究

研究課題名（英文）Study on mutually-referential structure and effective history concerning sketches in the journey diaries of Le Corbusier

研究代表者

松政 貞治 (MATSUMASA TEIJI)

富山大学・芸術文化学部・教授

研究者番号：30252612

研究成果の概要（和文）：ル・コルビュジェが「東方への旅」で残した多くのスケッチや写真の対象が、なぜその場所や構図で描かれ撮影されたのかを、現地調査を通じて分析した結果、装飾や部分の詳細表現が特徴的な、この旅に出る前の彼のスケッチに比べて、トルコやギリシャ、イタリアの歴史的な建築や遺跡の、より建築的に本質的なヴォリュームとそれらの配置、構図への関心が増大し、周辺の場所や対象、構図の可能性の中で、この関心を最も的確に満たすシーンが中心主題とされ、しかもこの本質を捉える能力が彼のその後の作品や著作に活用されていることが実証的に明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：After the analysis of the reasons why the objects of many sketches and photos left in the “journey to the East”(1911) by Le Corbusier were drawn and taken at the place and in the composition, through the practical research, it became in fact clear that his interests in the volumes, their distribution and composition, which are architecturally more essential in historical architecture and ruins in Turkey, Greece and Italy than those of his sketches before the start of this journey, had increased, that the scene which can fulfill his interests most surely, among the large possibility of places, objects and compositions, had been regarded as central theme, and that this ability to apprehend this essence is used for his later works and writings.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：芸術諸学、ル・コルビュジェ、建築史・意匠

1. 研究開始当初の背景

24歳の時の1911年6月から4ヶ月余りに出掛けた、ドレスデンからプラハ、ウィーン、ドナウ河岸、トルコ、ギリシャ、イタリアを巡る「東方への旅」は、その後のル・コルビ

ュジェ（パリに移住するまでは本名シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレを名乗る）の建築作品や著作に大きな影響を与えた。この旅は、モダニズムが見誤っていると彼が感じ始めた西洋文明の起源の意味と「古典精神」を

探る時期と重なる。この旅の中で書き留められた6冊の手帖の数百枚のスケッチや記述は、制作・著作活動の傍らに常に携えられ、彼の著作で何度も再録され、デザイン・モチーフや「空中庭園」など多くの概念の典拠にもなった。その後、行方不明となっていたこの手帖が1987年の生誕百年の直前に偶然、再発見され、『東方への旅・手帖』として各国版で刊行された。『手帖』は彼の生涯だけでなく近代建築全体にとって、創作活動における影響作用史的な相互参照構造を考察するための極めて重要な史料であるが、仏伊独英の各国版ではグレスレーリの解説だけが翻訳され、原文は一切翻訳されず、注釈や参照関係の解析は為されなかった。そのためその後の各国の研究においてもこの視座からの考察は発展していなかった。本研究代表者が共訳した邦訳版（同朋舎出版、1989）だけは、別冊の形で手書きのノートの詳細まで訳し、彼の旅程における相互参照的な思考を辿り、具体的な分析資料を付した。「場所のイメージ」では彼が訪れた場所、スケッチを描いた場所、旅中で想起した場所を整理した。「テキストの対照」として『東方への旅・手帖』と『東方への旅』（1966）のテキストの対照表を作成した。さらに「デッサンの再録」で『手帖』のスケッチが再録された箇所を彼の主要11著作について克明に指摘した。

これらの参照構造の研究の意義やその数事例については論文や著書で部分的に発表した。本研究は、その試みを、「旅」の後の彼の活動や交流を含めて、現地調査によりスケッチの場所や対象を同定しつつ、書簡や関連史料の探索を通じて、実証的に近代建築・芸術活動の領野で発展させるものである。

2. 研究の目的

20世紀の最も独創的な建築家ル・コルビュジエは、その作品や思想で、「師は過去である」と語っている。彼は旅行日記に多くのスケッチを描き、また独自の絵画を残している。これらの作品から、彼が歴史に影響された点、彼の建築が近代芸術と相互に影響し合った点について、影響作用史的な捉えかたで研究した。ル・コルビュジエの「建築観」、「芸術観」は、どのように建築家・純粋主義画家としての彼の「制作と思想」の起源を成し、近代建築・芸術活動の相互参照構造の核になっていったのかを、残されたスケッチと絵画から明らかにすることが目的である。

3. 研究の方法

本研究代表者がパリ留学中及びそれ以後にすでに手にしている収集史料や撮影写真の活用方法をまず検討した。その上で欠くことができないそれ以外の多くの重要な旅程の中から、特に重要なイスタンブール、ブル

サ、アテネ、デルフィ、テッサロニキ、ボンペイ、ローマ、ピサ、フィレンツェの現地調査を行った。さらにスケッチの実際の場面の特定やその意図（造形的ディテール、幾何学、大きさ・スケール感、色彩、素材、民俗性、工芸性など）の分析を軸に、『手帖』以外のスケッチや写真、絵画の同様の特定と分析を重ねながら以下のような全体計画を進めた。

(1)「旅」以前：師レプラトニエからの影響と離脱、古典主義作家リッターやルナンやショワジーのアクロポリス研究の影響、ロース、グロピウス、ミースのモダニズムとの交流の研究から、彼のデザインと思想の固有性を裏付ける参照構造を解明することを試みた。

(2)「旅」の中：旅以前の経験が旅の中での訪問先の決め方や見方、記述の内容に与えた影響を解明し、西洋文明や西洋の都市・建築の過去がこの旅でどのように再発見され解釈されたのかを、スケッチの場面やそれに加えられた記述の実況調査の面から探究した。写実的な描き方のスケッチから一瞬にして対象の本質を捉える方法へとなぜ変化したのかを、光のヴォリュームの配置に西洋建築・芸術の本質を感じ取ったためであると仮定し、それを旅程の多くの描写場面によって実証しようとした。

(3)「旅」以後：旅以前の経験と旅の中での経験が彼のその後の著作や設計計画に与えた影響を解明し、彼の思想やデザインが同時代やその後の建築や芸術全般に与えた影響の中から重要なものを抽出しその関連を、ル・コルビュジエの芸術活動の全体から探究した。

(4)『手帖』を中心とするル・コルビュジエを巡る相互参照構造全体について解明した成果を、近現代建築、ひいては近代芸術一般における参照構造の相貌を捉えるための範例の対象とし、本研究代表者がこれまでパリの都市建築などを事例にしてまとめた考察を修正し発展させることを試みた。

この計画に従って、実際に現地へ赴いて調査、場所や対象、構図を同定した内容は以下のようなものである。

「旅」に出る以前と「旅」のル・コルビュジエを巡る参照構造の解明については、平成21～24年度において、常に、『手帖』の中で描かれ記述された都市や建築の様々な場面を調査し、同定するほか、パリのル・コルビュジエ財団に収蔵されている書簡や図面や写真などのオリジナル史料を調査した。特に「東方への旅」から持ち帰ったスケッチや彼が撮影した写真や史料などの調査・分析が重要な作業となった。それぞれの年度において手に入れることができた調査史料・参考文献に基づいて、彼の志向における近代建築全体との参照構造をそのつど解析し整理した。

平成21～22年度に、主にフランス、スイ

ス、ドイツの調査・史料収集を実施しその解析を行った。当時のジャンヌレに関して論じた文献を解析するほか、パリのル・コルビュジエ財団やスイスのラ・ショー=ド=フォン市立図書館に収蔵されている、主にレプラトニエやリッターとの交流を巡る史料などを調査するとともに、『東方への旅・手帖』のスケッチや記述の対象となった主な都市や建築物を調査し、それらに見いだされる参照構造の解明を試みた。その間、各年度を通じて、パリでフィリップ・ブドン氏（パリ・ラ=ヴァイレット建築大学名誉教授）や『東方への旅』の英訳者イヴァン・ザクニック氏（米国リーハイ大学名誉教授）とも研究協議を行った。

平成 23 年度に、主にフランスのパリ、スイスのラ・ショー=ド=フォン、「旅」の行程中のトルコ、イタリア、ギリシャの調査・史料収集を実施しその解析を行った。イスタンブール、ブルサでの異文化との接触などのほか、ポンペイ、ローマ、フィレンツェ、ピサなどでの旅程を辿り、ギリシャの建築との対峙を経験したことによる彼の先行のイタリア旅行（1907 年）との大きな変化に着目しつつ彼の参照構造を解明することを試みた。

平成 24 年度に、「旅」の行程のうち、前年度予定していたが政情不安のため延期していたギリシャでの最も重要な調査と、前年度の補足調査が必要になったトルコのイスタンブールの調査・史料収集を実施しその解析を行った。特にアテネやデルフィ、テッサロニキでの「古典の光」との対峙を中心に調査と参照構造の解明を行った。

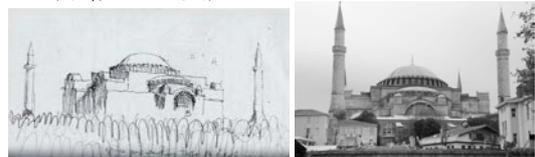
「旅」以後のル・コルビュジエを巡る参照構造の解明については、主に平成 22 年度から、彼の「東方への旅」の後の著作や作品と『東方への旅・手帖』のスケッチや記述との具体的な対応関係を抽出した。「旅」以後の彼を巡る参照構造に関連する史料についても主にパリの「財団」やラ・ショー=ド=フォン市立図書館を中心に調査・史料収集を行った。

全体を通して、西洋の建築史や建築論史におけるル・コルビュジエの思想と建築の相互参照構造を位置づけることを試みた。パルテノンからアアルトやシザなどの現代建築に至る建築デザインの特に近現代史全体におけるル・コルビュジエを巡る連関ないし系譜や、建築論の歴史におけるとりわけ自然や幾何学、フランスの建築思潮における自然・古代・巨匠の「模倣」や「類型」の概念を、ル・コルビュジエの思想と建築の模倣的・類型学的な位相に関する考察に援用し、建築一般における相互参照構造の相貌とその意味を記述するための新たな概念の可能性を探究した。

4. 研究成果

本研究期間中に、5 回の海外現地調査を実施し、延べ約 80 日の調査・史料収集を行った。得られた調査結果は、ル・コルビュジエの建築作品やそれらとの相互参照構造が見出される他の建築家の作品を調査し撮影した写真や関連図書資料、彼の『東方への旅・手帖』以外のスケッチや写真、レプラトニエやリッターや家族との手紙、リッターのスケッチ、「東方への旅」の旅先から送った原稿を無断で改編して刊行された『ラ・ショー=ド=フォン通信』などの史料の複写資料、『東方への旅・手帖』の中や携帯した大きめのスケッチブックに描かれたおよそ 400 枚のスケッチについての、場所、対象、構図などを同定し調査した際の、その周辺・近辺を含めた撮影写真約 4 万枚と、約 200 時間のハイビジョン撮影映像などである。その中には、これまで彼がどこで何を描いたのか、正確には同定されていなかった多くのスケッチや写真についても、本研究の調査により、初めて明確に同定することができたものも含まれている。これらについては未発表のため、研究成果として改めて発表するとして、次に、場所や対象が知られているものについて、なぜそれらに彼が関心を持ち、その構図でスケッチを描き、あるいは写真を撮影したのかについて調査研究したいくつかの事例について、しかもスケッチに関してのみ、彼の旅程の順に、同定した際の本研究者の撮影写真を挙げながら論究したい。最も重要な対象国のギリシャの調査を、政情不安のために最終年度に延期したため、それとの関連から行う計画であった全体の調査研究についても、予定より遅れ、逐次、研究論文等として、まとめているところである。ここではその概要を記したい。

(1) トルコ：イスタンブール、アヤ・ソフィア（手帖 1-78 頁）



このスケッチの頁には、「A タイプの窓のために、スケールが不明」と注記されている。その前頁にも以下のような記述があり、大きさという建築の本質について語られている。「モニュメンタルで壮大な外観を与えたいなら、何よりもまず、ヒューマン・スケールの観念を捨て去る必要がある。」「東方への旅」に出る前の、ラ・ショー=ド=フォン美術学校の師レプラトニエの強い影響を受けたアール・ヌヴォー的な詳細なスケッチからの逃避は、ビザンティンのこの巨大なヴォリュームと空白の壁の意味を語りながら、スケールを主題とすることで決定的なものとなっ

た。

(2)トルコ：イスタンブール、ガラタ塔（手帖 1-79 頁）



上記(1)のアヤ・ソフィアのスケッチにこのスケッチが続き、以下のような注記が添えられ、イスタンブールのヒューマン・スケールの街並に立ち並んで「配置」される Monument のヴォリュームに関心を示している。「a, b, c は、根本的に異質で、人を当惑させ、何事も分からない。D の大壁面は、まさしく神秘的の仲介者だ。通常スケールの家並とは、まったく接点がない。塔は傾いており、閉じた角度へと自然に向かっている。」

(3)トルコ：ブルサ、緑の墓（手帖 3-15 頁）



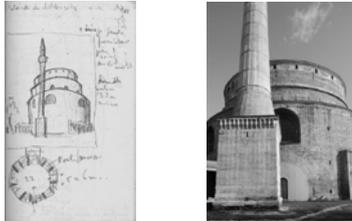
ここでも、上方で二重になった八角柱のヴォリュームに関心を示している。

(4)トルコ：イスタンブール、ガラタ塔から眺めたスタンプールのプロフィール（手帖 3-39 頁）



前面にはイエニ=ヴァリデ・ジャーミ、上部に巨大なスレイマニエ・ジャーミが見える。スタンプール地区の丘の背骨に並ぶ巨大なモスクの一つは、麓のモスクのドームの量塊とミナレットの垂直性に呼応させながら極めて素早いタッチのシルエットで描かれている。

(5)ギリシャ：テッサロニキ（サロニカ）、ガレリウスの霊廟（手帖 3-87 頁）



古代ローマの遺跡が転用されたモスクの、上方で重なった円筒形ヴォリュームと、後の時代に付加されたミナレットとの重なり、さらにはその上部の円柱形から円錐台を経て、基壇の四角柱に合体するヴォリュームの変化

を重層させる角度を取って選んでいる。(3)の「緑の墓」にも増して三重に分節されたヴォリュームを描くために、十分に退いて視点場を設けている。

(6)ギリシャ：アテネ、ヘロデス・アッティクスのオデオンから眺めたアクロポリス（手帖 3-123 頁）



アクロポリスの丘の上で、パルテノン、エレクトイオンなどが、プロピュライア（前門）と「戦うアテナ女神像（アテナ・プロマコス像）」が成す軸線とは一見、無関係に配置されているが、実はそれらのヴォリュームの角部が、階段を上りきった前門の内側の視点場から同じ角度で配置されているという「凡人は見過ごしてしまう秩序」に気づいたとする彼は、その軸線からのずれを確かめるために、軸線の東の延長上から描いている。対称軸の右に聳えるパルテノンのヴォリュームが、アクロポリスの高さやヴォリュームに比して、大き過ぎず、小さ過ぎず、実に見事に丘の岩の量塊と調和していることに注目したに違いない。この言わば「非対称の均衡」、しかもヴォリュームの「隠された秩序」による配置が、二段階的に平面を経て立面に表出された、幾何学と大きさの詩作とも言えるこのスケッチこそは、その後の彼に決定的な影響を与えた「ヴォリュームと配置の関係」を確信させた瞬間を描き留めようとした証に違いない。

(7)ギリシャ：エレウシス、デメテル神殿（手帖 3-130 頁）



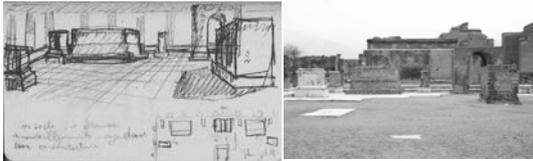
アテネ市民にとって神域であったエレウシスの聖なる道の劇的な湾曲傾斜地点の先に、実際にはない神殿のヴォリュームを復元して描いている。

(8)ギリシャ：デルフィ（手帖 3-151 頁）



ギリシャで最も重要な聖地デルフィで彼が描いたものは、誰もが認める重要な場所ばかりではない。中でもこのスケッチは、聖なる道に沿っているとはいえ、ほとんど注目されることのない場所である。単純な幾何学的量塊の比例と配置に惹かれたに違いない。

(9)イタリア：ポンペイ、フォルム南端の供犠祭壇と短柱石（手帖4-25頁）



上記(8)で看取された単純な幾何学的量塊の比例と配置への関心は、平面図を伴う建築的なオブジェ群として、極めて興味深いスケッチの形で昇華される。「ヴォリュームと配置の関係」は、12年後の1923年に刊行された主著『建築をめざして』の中でまとめられることになる「プラン」の概念に結びつけられ得ることをここで予見できる。「これらの台座は、見事に引きしまった関係にあり、ひとつの建築を生み出している。」という注記がこのスケッチに付されている。

(10)イタリア：ポンペイ、フォルム的一端から見たヴェスヴィオ山（手帖4-99頁）



ポンペイの最も重要な広場であり、中央のアポロン神殿の背後にはヴェスヴィオ山が聳えている。左右対称に開いているアーチ状の門、非対称のヴェスヴィオ山の曲線、アポロン神殿の基壇と祭壇の対称軸とは異なり右にだけ残存する円柱などの構成に、ヴェスヴィオ山の言わば借景が加わり、味わい深い遠近法を構成している。彼は、舞台のようなこの最も有名な場所の構図に惹かれたためか、複数枚のスケッチを残している。ジュネーヴの国際連盟本部計画案のプレゼンテーションのために、背後のアルプスの山々の曲線と対照させながら、適度に抑揚のある計画案全体のヴォリュームの透視図を描いた際には、このポンペイの光景を想起していたように思われる。この関心は、多くの建築家に影響を与えた。例えば、ル・コルビュジエの建築を生涯にわたって参照し続けた丹下健三の大東亜建設記念営造計画(1942)の軸線と富士山の関係や、広島平和記念館資料館(1954)における軸線と原爆ドームの見え方などでも参照されたと思われる。

(11)イタリア：ローマ、サンタンジェロ城から見たヴァチカン（手帖4-134頁）



ヴァチカンの中庭で描かれたとする『手帖』の注釈者グレスレーリの注記は間違っており、これはサンタンジェロ城の屋上で描かれ

た。サン・ピエトロ寺院のヴォリュームとヴァチカンの長大な建築の水平線の対比への関心が語られている。「僕が示したいもの、それは、中央部突出で図らずも際立っている長い水平線であり、ごく単純だが、それ自体豊かで貴族的な、大きな幾何学的形態による、その効果なのだ。」中央部突出と水平線の幾何学的効果は、かなり後になってから、彼の大きな設計計画、例えばソヴィエト・パレスや国際連盟本部計画案などに影響を与えたと思われる。

(12)イタリア：ローマ、サン・タレッシオ教会堂とサンタ・サピナ教会堂を含むアヴェンティーノの丘の眺め（手帖4-143頁）



「いくつもの表面からなる立方体！数々の線と、その寄せ集めによるシルエット、幾何学的な形態とこの唐突な[突起物]」。この記述には、ティベレ川の対岸からアヴェンティーノの丘を見上げた時に、中央の頭頂部を回転軸としながら、二つの教会堂のヴォリュームと、それらの基壇の量塊が、多くのアーチによってスケール感を与えられながら分節されていることに関心を示している。これはフィレンツェ郊外のカルトジオ会修道院（エマの僧院）や、さらにはアクロポリスとその上の量塊群を想起させる。彼の後の「ロンシャンの礼拝堂」の構想にも少なからず影響を与えたに違いない。

(13)イタリア：ティヴォリ、ヴィラ・ハドリアヌス、ポエキレの中央壁（手帖5-34頁）



極めて衝撃的なこの構図は、彼が見逃すことは考えられないものである。壁の存在感と、その端部のオブジェ的特性と水平線、そして付け根にある開口部の焦点性が呈する遠近感と奥行き、それらとことごとく対比を成し、横に広がる山の端の曲線は、当然のように描かれた。

(14)イタリア：ティヴォリ、ヴィラ・ハドリアヌス、カノプスの大エクセドラ（手帖5-71頁）



コンクリートによる半ドームのヴォリュームと底に穿たれた開口のコントラストに興

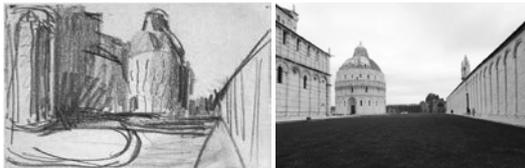
味を抱いている。特に、中央の開口部奥の上部から降り注ぐ光については、有名なスケッチ（手帖 5-68、69 頁）が描かれ、彼の「ロンシャンの礼拝堂」の明かり採りに援用された。

(15)イタリア：ガルツォ（フィレンツェ南郊外）、カルトジオ会修道院（エマの僧院）、回廊、「つげの生け垣」（手帖 6-7 頁）



丘の上のこの大修道院では、回廊とその周囲に葡萄の小さな房のように結び付けられた修道僧の個室住居のスケッチを描いている。教会堂や大食堂、回廊などの共同的な空間と個室住居の個々の空間の分節には大きな影響を受け、50年後の「ラ・トゥーレットの修道院」の設計に直接影響しただけでなく、特に集合住宅、例えばスイス学生館、ブラジル学生館、あるいは「300万人の都市」等の都市計画にも、大きな影響を与えた。個室住居は、それぞれが小さな庭を持っていることや、そこから周辺の景色を眺められること、寝室や書斎の簡素な意匠などにも興味を抱き、スケッチを描いている。書斎の壁と一体になった、鉄製の一本足で支えられた小さなテーブルは特に気に入ったようで、ヴィラ・サヴォワの2階中庭、レマン湖畔の母のための「小さな家」の庭の、湖畔に向けて穿たれた額縁状の壁と一体になったテーブルなど、多くの作品でこの意匠が参照された。

(16)イタリア：ピサ、ミラーコリ広場（『東方への旅』のスケッチブックから FLC204）



左の大聖堂と右の墓所の間から洗礼堂方向を描いたこのスケッチの視点は、ほとんどの拝観者や観光客が通る主要動線とは、大聖堂を挟んで反対側にある。1907年のイタリア旅行の際のスケッチは、細部を克明に描いたアール・ヌヴォー的なものであったが、それから4年後のこのスケッチでは、ヴォリュームと配置に関心が集中している。左の大きな大聖堂の量塊、右の縦溝のリブが横に連続する長大な墓所の遠近法、円筒上に半球ドームを頂く洗礼堂の左右対称のヴォリューム、これらの「図」と反転可能な程度に対比を成す「地」となった上下の空と芝生、それらが魅力的な構図を生み出している。イスタンブールでは、アヤ・ソフィアやガラタ塔のスケッ

チに見られるようにヴォリュームに惹かれた後に、アテネのアクロポリスにおいて建築の本質は光のヴォリュームとその配置にあると確信した彼の目は、4年後のこのピサの伽藍を全く違う視点と構図、タッチで描いた。

以上のように、ここでは、ル・コルビュジェの旅日記、特に『東方への旅・手帖』を中心にして、彼にとって「師」である過去の建築と、彼自身のその後の建築、あるいは彼を起点とする世界の建築の影響作用史的な相互参照構造の一端を、彼のスケッチの実証的分析によって論じることを試みた。

ル・コルビュジェの約 33,000 枚の全図面集が、ガーランド社から 32 巻にまとめて刊行された後に、同朋舎出版から『ル・コルビュジェ建築設計資料集成』として刊行される際に、本研究代表者は、その全ての図面を確認しながら、ル・コルビュジェ財団が作成したそれらの全カタログを邦訳し出版した。その時に明らかになったことであるが、彼の各々の作品で示された、設計の最初の瞬間に描かれた萌芽から、紆余曲折の途中の過程を見回した後に、どの作品においても必ず、比例や構成、配置などの点で最も優れた作品に辿り着いている。この旅において、その日の体験の中で最も優れた情景を逃さず彼が描き留めることができたことと、後に彼が設計という、創造の跳躍を期した彷徨の中で、最初の建築的な萌芽から、様々な揺らぎを経ても、最良の作品へと必ず至る彼の制作の方途とは、極めて類似した形で進行したのである。

旅で遭遇した、範例となる過去の建築、遺跡、風景を決して見過ごすことなく、その場所、対象の本質を素早く描き留める能力を鍛え、スケッチとして捉えられたそれらの対象の固有性は、彼の「もの見る目」と「手」によって、設計の過程で様々なシーンとして確認され、やがて作品として実現されたのである。このようにして、過去との対話から始められた旅日記のスケッチと、後の彼の作品や、さらにはその影響の下に多くの建築家によって模倣され変形された建築とが織り成してきた影響作用史的な相互参照構造の相貌の一部が明らかとなった。

5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松政 貞治 (MATSUMASA TEIJI)
富山大学・芸術文化学部・教授
研究者番号:30252612

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし